NANJING INTERNATIONAL
PEACE NEWSLETTER
南京国际和平通讯
南京国際平和通訊

50

December 2023 Issue 50
2023年12月第50期

ガイド

南京大虐殺犠牲者国家追悼式典が中国で開催
国内外の参加者がろうそく祭・国際平和集会に参加
57ヵ国と地域の130の海外華僑団体が同時に平和集会を行う
南京安全区ハイキング、「大いなる愛の道」を再び歩く
先祖の供養、忘れえぬ記憶のために

編者による言葉

親愛なる読者へ：

『南京国際平和通信』でまたお会いできて、大変うれしく存じる。創刊から5周年、50期の内容を通して、歴史を銘記し、平和を大事にする本記念館の理念を読者の方々にお伝えしてきた。これまでのご関心とご支持に大変感謝する。

2023年12月13日、第十回南京大虐殺犠牲者国家追悼式典が開催された。午前8時、南京大虐殺犠牲者の黙とうのために、記念館で国旗掲揚と半旗掲揚式が行われ、当日の夜、記念館の追悼式典会場でろうそく祭・国際平和集会が実施され、合計57ヵ国と地域の130の海外華僑団体が平和集会に参加した。

どうぞ、今期の内容をご覧ください！

南京大虐殺犠牲者国家追悼式が中国で開催された

12月13日午前8時、南京大虐殺記念館の追悼広場で国旗掲揚式と半旗掲揚式が行われ、大虐殺で犠牲した同胞のための黙とうが行われた。10時、第十回南京大虐殺犠牲者国家追悼式典が記念館広場で開催された。10時01分、すさまじいサイレンが響き渡ると同時に、汽笛と車のクラクションが一斉に鳴らされた。人々が頭を下げて、犠牲者のために黙とうをささげた。

△12月13日南京大虐殺犠牲者国家追悼式典の様子　（撮影・新華社季春鵬）

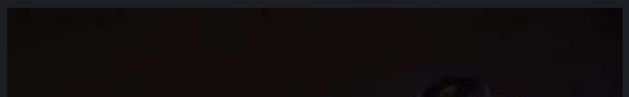
86名の南京市青少年代表が「平和宣言」を読み上げ、6名の社会各界の代表者が「平和の鐘」をともに突いた。3回の鐘の音と同時に、3000羽の鳩が飛ばされた。

△青少年代表が南京大虐殺犠牲者国家追悼式典で「平和宣言」を読み上げる
（撮影・新華社王博）

△12月13日、南京大虐殺犠牲者国家追悼式典の現場で平和の鳩が飛ばされた
（撮影・新華社　季春鵬）

国内外の参加者がろうそく祭・国際平和集会に参加

12月13日夜、記念館の追悼式典広場で無数のろうそくが並べられ、冬の夜の小雨で灯が揺れている。国内外の参加者が2023年ろうそく祭・国際平和集会に参加した。



「屈しない紫金草よ、冷たい雨風に負けずに生える。空に向けて、太陽に向けて、強く歌う。」南京紫金草芸術団の児童合唱団の60余りの子供がオリジナル曲「太陽に向けて生える紫金草」を歌い、寒い夜の中でその歌声が人々の心に響いた。

子供の歌に感動した日本紫金草合唱団名誉顧問の大門高子は次のような心境を述べた。長い間、日本紫金草合唱団の団員とともに、被害者に謝罪する気持ちで活動し、心の底から歌い続けてきた。今回、南京の子供たちの歌から、数世代の年代が離

れたにもかかわらず、平和を願う心の声が一緒だと感じた。日本でもこのような無邪気な子供の声を聞けたらと希望を述べるとともに、いつかまた日本合唱団を率いて南京で公演したいと述べた。

　アメリカ人ジョン・マギーの孫であるフレデリック・マギー、南京大虐殺生存者馬秀英のひ孫の馬雯倩、生存者健康ケアサービス団体、江蘇省人民病院の医者と看護師代表、そして大学生代表、紫金草ボランティア団体の代表などが集会で平和を願う気持ちを述べた。

　1937年の冬、アメリカ人ジョン・マギーが16ミリカメラで日本軍の暴行を記録した。第二次世界大戦の後、彼は極東国際軍事裁判で証言した。孫のフレデリック・マギーは、「祖父は南京でその生涯の大半を過ごし、南京という町を深く愛している。それから長い年月が経ち、私もやっと自分の目で南京を見ることができた。今の私は南京の人々、中国の人々と心がつながっていると感じる。残りの人生で南京の歴史を語っていきたい。」と話した。

　南京大虐殺記念館館長の周峰があいさつで、「犠牲者への一番の弔いはその生前の願いを実現することであり、平和を大事

にする理念を実際の行動に付し、過去の悲劇を二度と繰り返さないことである」と話した。

57ヵ国と地域の130の海外華僑団体が平和集会を同時開催

12月13日、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ドイツ、フランス、カンボジア、イタリア、アンゴラ、スペイン、インドネシア、マレーシア、タイ、ミャンマー、フィリピンなど57ヵ国と地域の130の海外華僑団体による南京大虐殺犠牲者追悼式が同時に開催され、所在国で「人類の災禍・1937南京大虐殺」歴史展と平和祈念などのイベントが実施された。2014年から、愛国華僑の努力の下で、南京大虐殺の歴史がより広く海外で知られるようになった。

△カナダ和楓会の「正義を守り、平和をともに守る」歴史文化教育フォーラム

南京安全区ハイキング、「大いなる愛の道」を再び歩く

11月25日、第七回「感恩・南京安全区」国際平和ハイキングの開幕式が南京師範大学随園キャンパスで開催された。南京大虐殺生存者の子孫、中国人を守るために南京安全区に残った外国人の子孫、並びに中国江蘇省、南京市赤十字会、ボッシュ株式会社、南京大学、南京師範大学、ラーベ記念館など、合計150名あまりの社会各界と国内外の人々が安全区を再び歩き、8.6kmの道で忘れえぬ記憶を思い起こした。

先祖の供養、忘れえぬ記憶のために

12月3日、記念館の犠牲者名簿の壁（嘆きの壁）の前で「南京大虐殺犠牲者供養イベント」が開催された。

南京大虐殺生存者の子孫、南京大虐殺の歴史の記憶の伝承者代表の曹玉莉は、「両親の生前の最大の願いは、日本が南京大虐殺を実行したと認めるのを目が黒いうちに見届けることである。歴史の証人の使命を一刻も忘れることなく、大虐殺で被害に遭った家族と同胞を決して忘れてはならず、南京大虐殺という歴史の真相を次から次の世代へ伝えていくといつも強く話してくれていた。」と話した。

記念館館長の周峰は、「南京大虐殺という大惨事は本に書かれた文字の歴史だけでなく、無数の個人と家庭の被害の史実であり、一人ひとりの中国人の歴史である。過去の苦難は忘れてはならない。この名碑にみっしりと並んだ犠牲者の名前は刻々と我々の目を覚まらせ、86年前の悲惨な歴史を決して忘れない。」と話した。

南京大虐殺生存者艾義英、夏淑琴、劉民生が花を持ち、家族の付き添いで「嘆きの壁」の前に来て、亡くなった家族に花を手向け、追悼の念を述べた。

生存者子孫の代表、学生代表らが南京大虐殺生存者名碑に刻

まれた名前を一つずつ隅を塗り替え、追悼の気持ちを託した。

学術研究

南京大虐殺を取り上げた新刊が発表

12月6日、社会各界が参加した「歴史を銘記し、平和を大事にする：2023年度南京大虐殺史の研究新刊発表会」が記念館で行われ、近年新しく出版された南京大虐殺の歴史と国家追悼式に関する出版物が紹介された。基礎研究、社会教育、国際伝播という三つのカテゴリーに分類され、歴史を銘記し、平和を大事にし、未来をともに築いていくという共通の気持ちが込められている。

記念館が編集を担当する『時間の証人』には南京出身のカメラマン・速加が撮影した大虐殺生存者の肖像写真、証言と撮影手記が収録されている。2016年、記念館の招待を受けて、速加は生存者の間に入り、5年間をかけて、86名の生存者の貴重な映像を残し、撮影の経過を手記にまとめた。

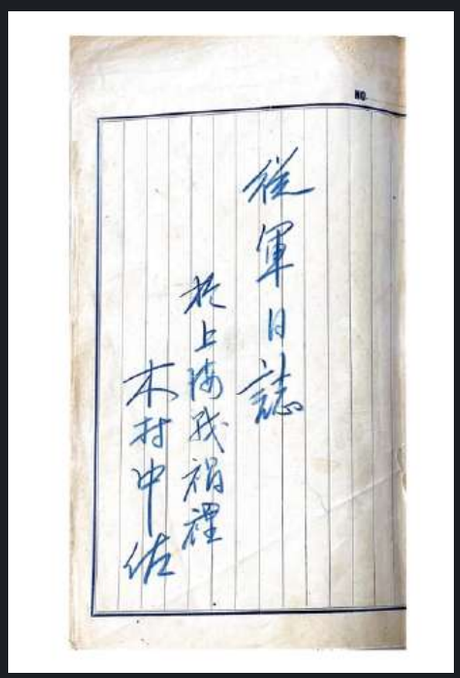
また、記念館雑誌社の『南京大虐殺研究』誌は2023年、中国

語版3期、英語、日本語、フランス語それぞれ1期刊行した。アメリカやイギリス、日本など40ヵ国と地域の大学と研究機構に向けて発行され、国際学界での影響力が向上しつつある。

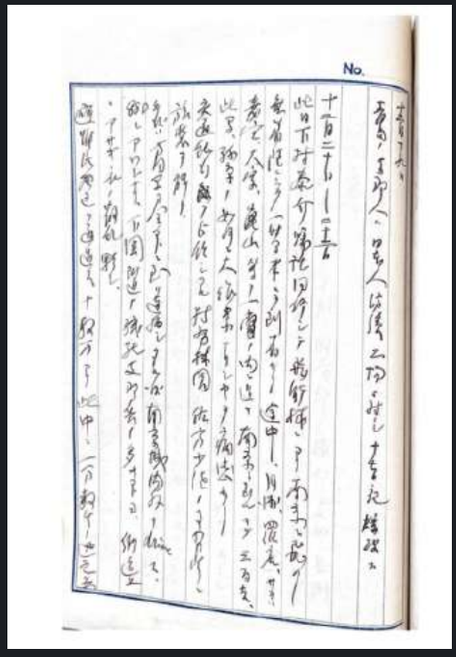
1103点（セット）の歴史資料が記念館に収蔵

12月8日、記念館で2023年新たに集めた1103点（セット）の歴史資料の記者会見が行われた。

日本上海派遣軍報道部、華中方面軍特務部の木村中佐の「従軍日誌」は1937年8月16日から12月31日までの情報収集と「宣伝」などが記録された。

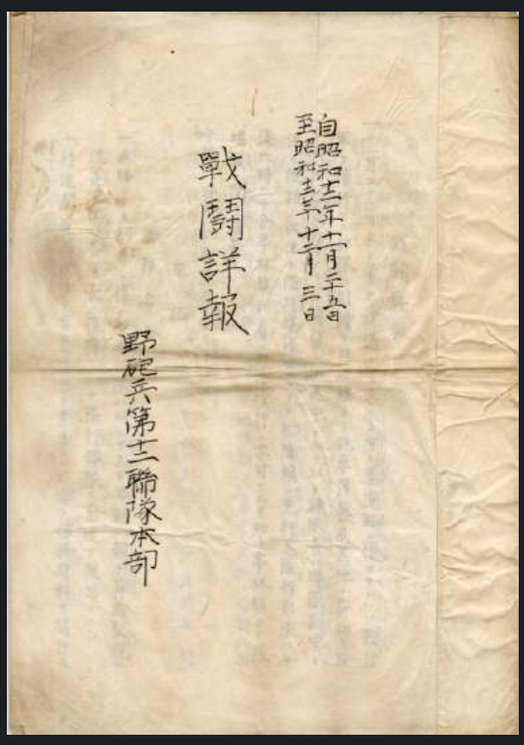


△日本上海派遣軍報道部、華中方面軍特務部木村中佐の「従軍日誌」



△「従軍日誌」12月20日-22日（一部）

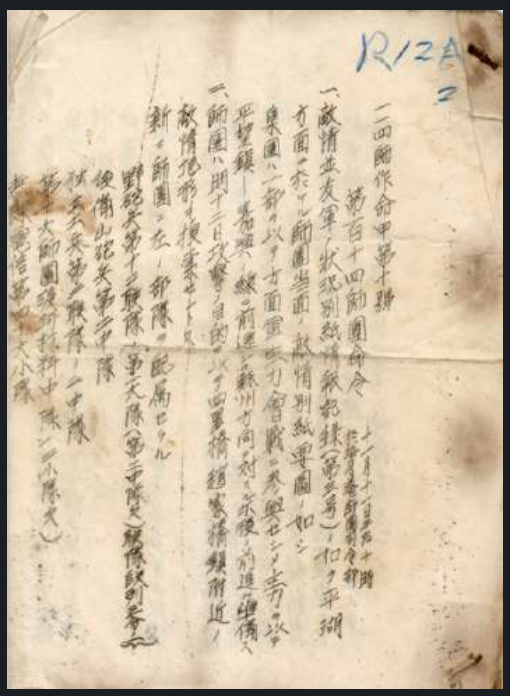
日本友人の大東仁が発見した日本軍野砲兵第十二連隊の軍隊書類「戦闘詳報」には、連隊長浅野中佐が発した命令が記録され、中では、「南京進軍」のために、泥道など「からゆきさん」を克服し、急いで師団に追いつくように野砲部隊に命じるという内容が見られる。また、兵糧の用意を事前にして置き、進軍沿線での頻繁な「徴用」がないように備えておくと強調された文句が見られる。



△「野砲兵第十二連隊本部戦闘詳報」（一部）

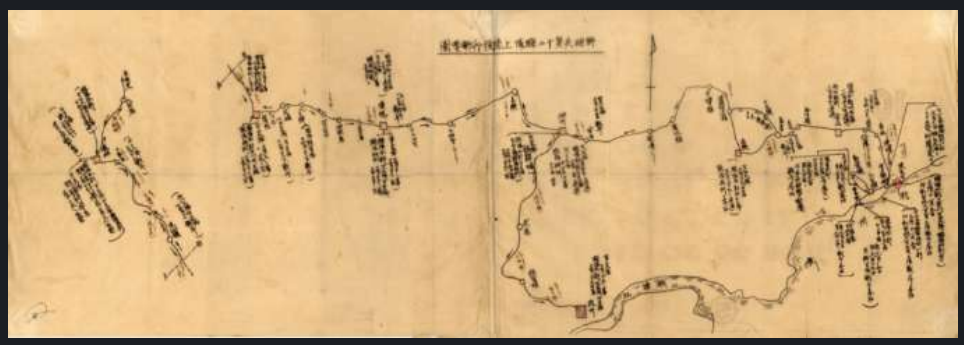
ほかには、日本軍第一一四師団の命令甲第十号が記録され、第一一四師団長末松茂治が1937年11月11日に発した嘉興と蘇州

への侵攻開始という作戦命令である。



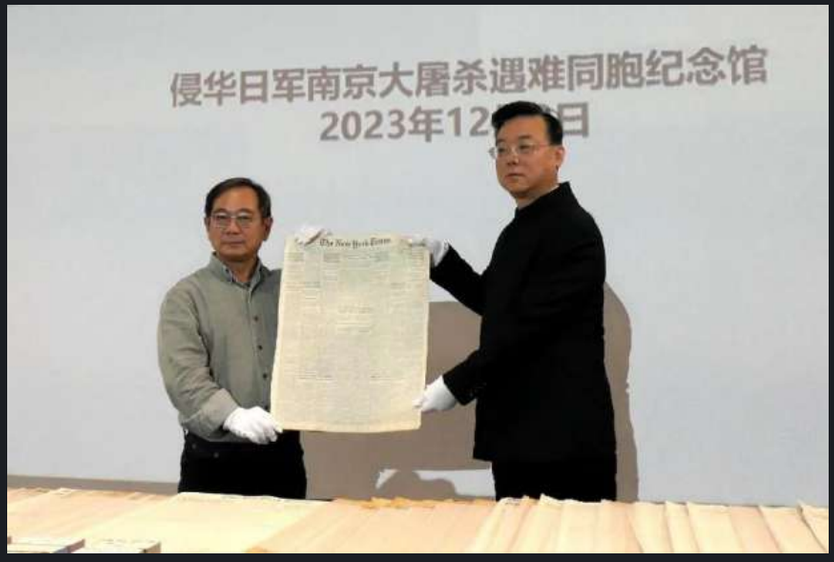
△日本軍第一一四師団命令甲第十号

さらに、「野砲兵第十二聯隊上陸後行動要図」には1937年11月5日の杭州湾上陸の後、広徳や蕪湖などに進軍する路線図が記されている。



△「野砲兵第十二連隊上陸後行動要図」

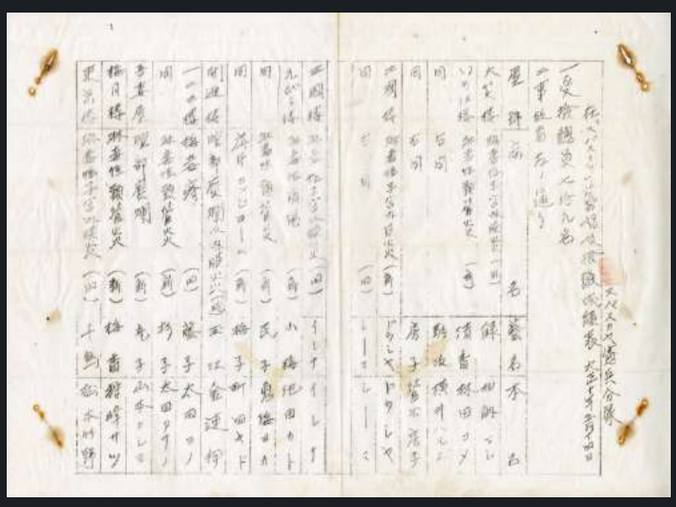
中国系アメリカ人の魯照寧がアメリカで集められた125枚の新聞紙を記念館に寄贈し、ニューヨーク・タイムズやシカゴ・トリビューン、サンフランシスコ・クロニクル、ニューヨーク・ワールド=テレグラム、St Louis Post-Dispatchなど合計14種である。これらの新聞には中国侵略初期の日本軍の上海や南京への侵攻、日本軍の暴行、そして中国の抵抗などに関する報道が掲載されている。



△魯照寧が記念館に史料を寄贈する（撮影・賀鵬飛）

1937年12月6日、アメリカ紙ニューヨーク・タイムズと1937年12月14日のアメリカ紙シカゴ・トリビューンには、二名の日本軍士官が「百人斬り」競争をしたという報道が載せられている。

記者会見では、「スパスカヤ憲兵分隊　在『スパスカヤ』芸娼妓検徴成績表」という日本軍の憲兵書類が紹介された。書類の記載時間は1921年5月14日で、内容は日本軍病院で行われた「従業婦」の身体検査の資料であり、中には79名の「従業婦」の氏名、芸名、屋号、病名などが記録され、ほとんどが性病を患っている。「慰安婦」問題の研究者、日本関東大学の林博史教授によれば、シベリア出兵の間、「従業婦」を連れた「仮親」が軍隊に同行し、日本兵のために後を付いて、売春させられていたという。「従業婦」のほとんどが日本人で、朝鮮人もいて、林博史教授はこれを日本軍「慰安婦」制度の「前史」とした。



△スパスカヤ憲兵分隊　在「スパスカヤ」芸娼妓検徴成績表（一部）

南京護衛戦で教導総隊工兵営営長を務めた鈕先銘の息子、鈕則堅は父親が生前書かれた回想録を記念館に寄贈した。